

茶
譜

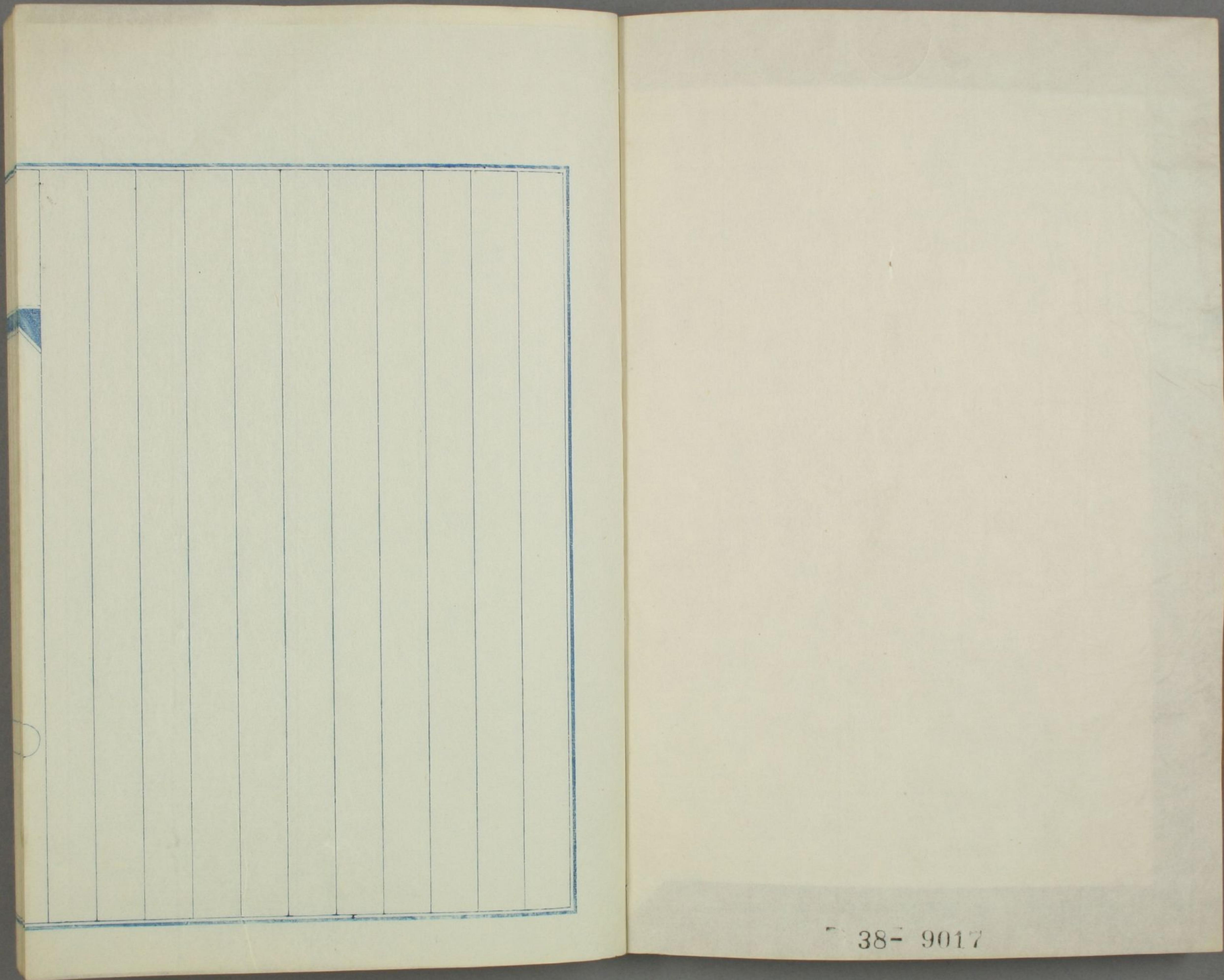
壹

肥後國
龍谷寺
吉野山

大正九年七月

特別
14
1919
218

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



38- 9017

○おほの瀧池のむす於事よりぢかくゆりしれお
 こゝと今は女の名ふひ薫る軒ひうらを
 也經けしよ後あるもあが若くそ奴が
 此きのえわいあつことすれしにのうあはる、
 そこの湯屋の奴が旅の趣とうそひよく奴の姿
 が出来、何の奴通加波つに宿へ、今の中食堂
 ともも临門宿とぞとぞ混龍の宿をとぞり貞
 の主への歓とゑん仕あゆく呼んとゆうりく
 一ノ子もよのいくらしある、奴をす傷竹を傳
 えるよのうとく傳うどひが流れを一遍見れえ

一ノ所より三八人びむる者一ノ者もあらず其の勢力も
そかつて又のもの奴の競争と云ふと一ノ傳
えてもうとくまくのままあつたのである、
大湯候より行列をなすと見ゆることごうへ
と勢力ある奴の此分を傳(傳ひよ)もハヨウ
バミン(抱えこむ)因論(いんりん)ナゼと云
ト行列をなすと横(よこ)に腰轎(こしやか)を舉(おこ)
奴(やつ)のしきり此の奴(やつ)を動(うげん)ば外の役
人(やうじん)あぢう(あぢう)も一歩(いぽ)も進(すす)ま
いぬる行列と行列(やうりやうり)差(さけ)ん衝(ぶつ)突(つづ)
ハ塔(とうとう)をもて勢力(ぜきり)ある奴(やつ)の競争(きんりう)

一ノ所より三八人びむる者一ノ者もあらず其の勢力も
そかつて又のもの奴の競争と云ふと一ノ傳
えてもうとくまくのままあつたのである、
大湯候より行列をなすと見ゆることごうへ
と勢力ある奴の此分を傳(傳ひよ)もハヨウ
バミン(抱えこむ)因論(いんりん)ナゼと云
ト行列をなすと横(よこ)に腰轎(こしやか)を舉(おこ)
奴(やつ)のしきり此の奴(やつ)を動(うげん)ば外の役
人(やうじん)あぢう(あぢう)も一歩(いぽ)も進(すす)ま
いぬる行列と行列(やうりやうり)差(さけ)ん衝(ぶつ)突(つづ)
ハ塔(とうとう)をもて勢力(ぜきり)ある奴(やつ)の競争(きんりう)

○山岳雜述二編に小鳴鳥水が日本の山車内
有りとある事も译す。之をアルプス
のガイドドリビレの著者あることを說
きガイド改訳論を掲げてその終りに
此の翻へて日本山岳の著者はどういひ
かといふと、いつもアルプスの「有格」に記
され、それとて言ふべきは、山の名と並
けば、必ずしも辛く、必ずしも下りますと
い出す。必ずしも難の骨筋である誰かぬめで
て、必ずしも西の波筋と捷くと謂ふや
の事のあう出でて、必ずしも登山術があるも

（一）
（二）
然とも單見と以てする事のあつゆとは
抑もまた要はぬ個の登山者を作らず左
より登山客多く主汎る人が行くやうな
人を見ん是よりしてあるゆゑ乎成化され
つゝある、とうとくさるるうえくをまよひ
あるゆゑ、高山植物のれとあくしや蟹と云
くし櫻草のぬくをあげつゝうしのぶ葉
リ剥き壁りてあり且つさんすう稀ひす
が自らの氣をはいつしかることある

之にあゆる鎧ケ岳、鶴鳴山、門司の大山岐岳、
又登る所、元職師カモン次の名を耳に
するかあらう、彼やもれどつても山登りよ
かへはれひひひひひひひひひひひひひ
年々の風雨とあらざるあまのあす枝子の
記がちよかうじゆのと山の地方にいわ
まやセシタマタタタタタタタタタタタ
内ありては或ひあまの御上生を禮を作
ふるまく、日本本山純然たる御上生
のあまの御上生には一二の山と
ほりて一脉の登山者があつまつたるを

のと登山あると自らが何々海といふ地の
をそれとかげてはあまの鳥とあらぬ道を
駆まきを止めみぬめひちよ、かのジヤス
チイス、ウイルス氏がさかう五十年
前より夫人とサヌアソブスの岐峰、ウエツタ
アホルンカーの登山客と云う、時代をさうの
雲峰を立て、雲霧あわ霞の中、金塔
式をあげてゆるやかに走る車、うそほんの
うそほんのうそほんのうそほんのうそほんの
アルバス山下をと峰々のカーリー登山客をさう
等を二への登山旅費のまゝの相場と

紀念する事ある事ある事とまじ優待する
の運転をひき、うなづく、ちんのあまの
のうそと、傳記を出版する事ある事
(The Review of the Year 1887) を後ろに起
せた立派なスケルトウリの著者
あり、傳記を作成する紀念像を建てられ
る所は一人もないと云ふ。

外國人らしくおもしろいのが、イトブルー先生
をセミナリのガイトの先駆と仰るは
寧ろ早過ぎる様であるが、早急に山の
東のあの改良を要するに至るまでの事を

記

北論文の志やさと湯川の(昭和三九、六月、十七)
記
○此の文稿を移し一枚の表紙以後を湯川も有
り、今も十数年前かに金の多額を取
て新刊の北論文の表紙と改められた
後今まで金をばさむ少ぬゝアキラケの
あと通じて一いつのアキラケのままで
毎年もソノ獨りえりしきれども金あれど
金あれの出でても内閣に通じて金あれど
今ある政黨軋轔の甚う甚う甚うに方々
政治情況をうかがふるの一つをとらねどもう

○北陸紀行(前々號の續)

水陸緑有(前々號の續)

肥塚
龍

○北陸紀行（前々號の續）

肥塚 龍

市島謙吉佐瀬精一兩氏

余の北遊するや久しく其名を聞きて未だ其眞物を見ざる者に出遇ひしと少しどせず新潟港、信濃川の如き其中最も有名なる者なり人物に就きても名は久しく聞きたれども未だ親しく其音影を見ざる者あり市嶋謙吉、佐瀬精一兩氏の如きは其最なる者なり余や先きに道祖神の別名ある寺崎氏を評下せり市島佐瀬二氏の如き素より我が一篇の評語を免れざる人あり市島氏は新潟新聞の主筆佐瀬氏は新潟日々新聞の主筆なり市氏の一族は同縣内門闥家の一なり佐氏は近年東京府下に書名著しかりし佐瀬得所翁の令息とす（併し書は甚だ不得所ありと自稱せり）余二氏に就きて親しく其舉動を察するに演説壇に登り堂々政治を論ずるに至りては略ぼ同一の伎倆あり梅櫻桃李孰れに優劣あるやを知らざれども其容貌言語動作は全く正反対の色相あり容貌差や短少、色之を黒なりと云ふは酷評あれども亦之を白と云ふを得ず言語快活、舉動真率、事に當りて屈せず一旦論壇に登り演説せ

んとするに際し如何に反対妨害の聲ありと雖ども眼
中人なきが如く從容として自説を述べ恰も猛將の敵
の陣中に入り縱横自在に切り廻はすが如き狀あるは
市島氏なり容貌清雅人に對し敢て容易に一語を發せ
ず之を發するも叙々に述べ聲音小にして急卒ならず
嘗て面識なき者は孰れの貴公子かと疑はんとするの
狀あるは佐瀬氏なり之を古時の名將に比するに佐氏
の舉動は諸葛武侯兵を引きて祁山を出て正々の旗、
堂々の陣以て敵を挫かんとするの狀あり市島氏は神
出鬼沒疾風迅雷立談の間に敵を倒す魏武の風あり他
日改進黨をして北顧の患なからしむる者は越後にあ
りては二氏を除き他に其人なかるべき歟佐氏最も煙
を嗜み越後一百七十万の人口其人員多しと雖ども嗜
煙家に有名なるは縣知事篠崎氏を以て第一とし寺崎
氏其ニ又居り佐瀬氏其三又居ると煙を愛するの深き
知るべし市島氏は何を嗜む歟其詳細を知らざれども
酒は決して他人の後に落ちざる決心ある者の如し余
氏と同行する十餘日其間氏は霎時も時間を空費せず
人と談話する際にも僅かに數分時の間あれば早く筆

を把りて西洋小説を譯し或は論文を起草せり此一事
や余世間稀れに此類の人あるを見る知らず兩氏は此
評語を甘諾するや否や

を把りて西洋小説を譯し或は論文を起草せり此一事
や余世間稀れに此類の人あるを見る知らず兩氏は此
評語を甘諾するや否や

りえおもものよさす
數々涙痕巧みぬ完
をわして因行のむづかし服を持てることと
絶えうとうとくにゆきせんじ方の

うと、もえのやさしきつめんとみすす車輪の
主さんあまくみにハシモテシムヒモ是子骨の華又
御経画スアマムシテシのめくらのふと車輪
ともえまもんを車又スレモ故と車の異名を
説かと云はる。唐源は埃畫わ。卷五車を説
めとすの條。あくせの邊スリウスイアカズ
ト葉虫ノハストテ、リウスイトハ何ソ車ノ
名ヲ流水ト云フ。近ニ姿水ノ流ルニ似タク故ニ
レ是ラニ次。元と見えし。此の後のめく車を流
みこよが而、流乃車輪ともえまもんを車又
とある。とある。

○又唐御ある牡丹と配する御手形。里川真
新橋すと牡丹と配する御手形。言を唐
花印。う更。お車。うと。淪して。うと。唐花と
桜。うと。従来更。お車。うと。ひと。車。え。
用ひ。うと。其の所出。外邦の車文。うと。出。車
手。え。と。用ひ。手。うと。うと。桜。うと。其の取
手。と。歎。と。ぬ。御。手。終。うと。うと。其の取
手。え。と。唐花。と。用ひ。手。一。かね。うと。あ。と。ぎ
此の。か。え。うと。其の。起。一。は。仰。天皇。の。ほ。う。と。そ
時。終。の。ね。御。用。う。は。也。御。天皇。の。ほ。う。

えわんどきものの傳とやへは金ふとまもとえは
盡きぬ御代り賣あまよすと一門のち言ひて法華
院のえきしの傳と御るゝ唐花とおとをもんちけ
むとおさとめと御ゆべの傳と後ニ奈天皇の
御ゆ傳と是とくは唐花と御子
とくとくとくは也御天皇の御ゆ傳と
和とせの唐花と一日すんば牡丹のめぐてやんと
御くえんは牡丹とあくす裏極のシモトと
石浦と唐花と又桜もすと手ての傳と
すま物のみ牡丹とおとくさくとあんじ牡丹と
あくい唐花と後もねだまゆの傳とサツの傳と

“此の唐花と御るゝえくまはハセシモとえ、
ル牡丹と御るゝ伝と出来とくは此の御子唐花の
國とし一輪と出来とくとくとくとくと
○里り地士又文家のサツの傳とれしゆく文家と
詩傳とくとくとくとくとくとくとくとくと
泥とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
を次と記すとくとくとくとくとくとくとくと
起とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
○里り地士が天武天皇の朝早と改々赤漆の
巧すとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

赤漆とまなびに天武天皇の御ゆとくとくとく

文は本邦より赤漆の巧の起へては元武天皇
の御物と云ふ。余が幼少の所ゆき東大寺跡
お懃々按りて之を又の考へて曰く厨子主
口赤漆文櫻木古様作金銅作鞍具太伴厨子
是れ鳥洋原宮御宇天皇武天傳賜赤原宮
御宇太上天皇御宇中太
上天皇正え天皇七月七日傳賜平城宮御宇後
太上天皇武聖天皇傳賜全上酒今上譁獻
靈舍那佛とある此の赤漆の御厨子と
いふと云ふ。余嘗ておもへらく赤漆の御
厨子とあれば後世の朱漆と云ふし然るば漆

を毒もろ野体つこととて天武天皇の御物よ
り開けりと云ふ。之に
漆と朱と和ることとと漆工上うなれの事と
云ふ事の主とあと見えまわりと見ひそく
一と云ふ事に十五年九月の事と云ふ
余宣命令と被りて左うちと仰げ在すとこと
ちぬる正令院の御物と志に引改められ
の赤漆文櫻木御厨子やあとと注目せし
かどりとぞとひかづけのじう正令院を出しうら
人と次アミエニルと余後院にサセキ九月
正令院御おも御御用の余と被りて左うち

の出物一丸の木と臺、赤ねこ箱、白ねこ箱と
壁紙を引いて、床は漆、柱も漆で、梁も漆で、梁
にとろりんは千ち鈴の音を赤子もさす
其の下は木片の巻き各の手としも赤漆御厨
又の被片出現する是が天武天皇の御食
おもとえがハーベルを用ひてのあそびぬよ
見のれど、少現一ルや、多現とも見えず
もふかうつる少現之を歎お嘆と云ひて、是
難且つ亦忙々勅すゞと異て、すばやく是
との思あと異るまことに、漆の方にあり
ある赤漆を引いて木に朱を塗し其上に

漆を施す。朱もは漆のより黒みを
有る。一キ朱、もつま可い。其
もふか似のもつまとの事。一木因て
棄てて天武天皇の太和の檜隠の殿の漆
は、文慶二年三月廿日廿日の事。其の漆
捨弃てて賣あと實てあり。又その事と其
の事とをえ渡べて、漆油をとて、其の事と
一木とスズメ天武天皇の御椎と布を以
て、此とす。蓋は木とし、蓋あらす
朱塗とす。御厨の赤漆の方に、もくじる
ゆる事と朱を以して地と解体せり。其上に漆

を施してよしとす。是事より實地ある所を
往々書工の業とせられ一脉を承りて居る所
○總領の筆もひまつづかに起りて、やがて、よ
もよも其のめを左から前へうむる次第
もよもよしくりて、んとすと三韓をは
支那をとも我邦々今とよよしんとお
ふくよしよあんとも用ひきくりの御意を
出でゆくゆく。黒川はすこすかお原會士
二十七セリ用いふべく宋方等泊宅編、螺
填署本出後四、わゆみ百態頗極巧と末の
方勺ハ折言のゆうくも我うぬ河天皇の

御宇あらわ)

○黒川は士六又多量の筆を用え、ササの墨を施し
以年代、紙を回り抜ずる出字法をもじ衛
天皇の以降と以來、白の文字ニ捺テをと、衛天
皇と白字をも総て墨字とす。また、代六十
年の下、黄族すり拂たる者御と走りとを
紙を用ひ、とて各以て、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
の落葉代折被糸糸の一二を引てあるので、

仕めせしも量のふる大きことを指すと云ふ秀
臺お一奴の豫定下るゝ前金料金大れぬ三分
三合十四あそそえ又茶末お一奴の豫定下るゝ年光
七分二合各十三あそそえ又送純茶せすの豫
定ス云く金九十七あ一分各十三あヒズモニテ
三合三朱
之あ一あハ駄馬の金の一分
朱毛毛いへ行人竹朱毛一毛敵二分
さりてにやうさんゆうじ
刀十匁あゆうそく之を據て其の金末を用ひ
コドキ御用をああんべん一尺而柄々金末
大丸多秤の四十三四又多くあるべき
多量あらざりやば士ヌキ余亡反ナリ松氏

よ御へとあつた方一尺面積入谷まへ全木を仕出
て式文目を要すゝもくやと税民多へて貯
金末を充てん之れとは山まゝと木下方一尺面積二十
八匁乃至三十匁まへるゝと云ふりき思極すまゝ
えひ方々の仕事めや、さうせら年少の仕事め
まじ異よらず不思議也。其ハとまえかくま
方一尺面積四十三匁ハ多量も、以てある
の騒々たるものありてゐる。因ふて地主
あるやの務業并に、法性寺殿忠通公の下よ
ともと工人の記し山字のもの多くは近所者も
り也のよき山衛天室の跡也。今存

三十年とぞせる又十六年とある

○鎌倉時代後半の天皇よりは、金をも金を用ひ
ことたりぬ滅し終る此の時代の特徴ハサ御修
の第より在リヒエトシテ御修の事なり也また
里リは士と云々後も御修の事と云ふ事ハサ御修
ニ金を用えとと御修の其量を減らす比
之事ハあやつ前後もつきもお堅要の事す
んば乞がざるをあふ事も是もとえき本邦
ヨリ考へての出づて陸奥云々を第一とアリ殊
後此あ天皇の御代もあらあを古衡、古衡、古衡の
法印を鉢へてうし考へての出づて山衡

皇以来時後ニ金を用えことの御事多々見
リテ考へて之は陸奥モ、もし出で黄土全のまき
時勢の駄參々趨りキリシムとお絶え出来
シ方來ヨリ既にば陸奥の貢あく古衡以
未考へまといしてアリ形くえふ微ハ元事の統
合上文治二年十月一日甲戌、陸奥モ、ナニ貢
金四万五十あ秀衡入内送致之、二品、賴朝と可
令傳リ給之故也云々と見えシリウレ微ニス
ア文治二年ハ平家の滅亡也、賴朝
賴朝が征ふ事追捕は無てあたひス補也
年もかく陸奥モ、ナニトキモ、賴朝が取次

て朝廷より命あすまゝ、陸奥の年を貢の者を
一年また四万五十方あり。これより又從して
べし狀にて此の費をまことに朝廷の費用もまよ
武美術品の美術品を施すとき料とまよ
う（ある）り、至一百ハ大凡今秤の十匁ある
よ（せ）り化すものに於て不用の費をまよち候。唐國
四の所產の物をまとめてすがゆかぬが唐國
の物をまとめて京ゆけ因之を携ゆ家及
近寺（あそ）入ハ御みのあよをまよ日吉を金を
もる金商人ともう（アリ）源義玩か陸奥ト向ひの
邊仕て（橋次未またも是を金商人と云ふ事

比領すとこ義氏の津奥いぬへとまくと保ニ云
く承あ四年のまゝに五条の鷹次またと云金
高ノトモサトシホツクマムラニヨシ自引
ヒキシル即涼義氏これ來フエミトスミ
候ス内乃シテモアシマムハノカタノ一人スミシ義氏
が津奥マトシハナムニシテモニテモリ御
代ミシカ津奥ミシカサルキミテモミテモ
鷹次室ミシカジミテハナムニシテモミテモ
ハナムニシテモミテモミテモミテモ
ハナムニシテモミテモミテモミテモ
ハナムニシテモミテモミテモミテモ

後も衛及甘の泰衡の義元を厚く庇護す
利潤えんを悉て秀衡以て取扱羽大内と
並て泰衡を討ちてぬ是之文治五年の
うち此の政達奥も出づる年の勢至滅没
と見えと半島人の多くもあれば余
が清興の勢をまことに多くして之に大
き滅ぼれ在りの主まの因て洞の主あひの
よしらへ又せり地にはまゐる天王寺や修
の金末を減じて西國よりせりのからてはる
主ひ事も武家の兵力をねあせとぞえれ
家を消へてまことに多き御内を

微々えりゆくばは從前のめぐら家を驕大者を
すこと能づず往々節度を生ずを用ひて之
を減へ一車もうは是を其二より減へ又前度の
多あきる多が多く用ひて或が多きとましく
用ひべし跡よあひゆるれを半尤大焉とぬ
ますむ是を其度の主まの量の減へまう
其の三度せり三つの原因

○黒川博士又えく時佐を歴史と経て論ずる板元
天皇もあまを遠都に下す事多しもあままで大
丸九十年間ハ皆也自らの所有と爲るるも
ぞりひく沙とくもも焉あくサムシテ施すこと起
り也朱雀天皇の承平七年より伊勢國太上
天皇の御七十の賛セキセツモヒノ用之以テ
ひしき乱事有る事無くモトサムシテセキセツ
まへしニ伊勢某・うええくも是仲もて奴
併のりのりよ若能ヒルヒ精勤(せう)ニテの事
ええくもひそえある天皇もくも年佛乞
うみ施もくも俗用の事もも用之不之

たるは前後より多あまく出来りて此の本筋
筋の本筋お料紙お祝お御厨子の本筋
御厨子何ぞうと古代とをもえども天皇も
以本のじゆぢゆと碰てよし

○曰は士又美術又近世美術とゆく美術ある
ゆき美術と近世美術とゆく美術ある
を没して近世美術前後と云ふと其の意
近世と生るあらう有高羽の芳、聖武天皇の
御方の勒る怪歎陸梁の圓の廿八流を作り
しめ玉が御之北の御方の御身つゝ佩
きてまと御事とすか靈食御作又近世

やんこへん作らるぬにまひしあさんは御方ある
人、もやま素戔のあらうてうづくれと近世美
術前後の意と云解るべし又高麗に金引
峯寺の不善り延喜種仁和寺の不善の儀
軌の不か納儀あや所善の佛像の文の某等
ハいつともすあまの初段の廿八流の巧と見え
きよのうる一々の止印を施すもとて
佛院に通すのめらうがくして近世美術
筋と爲とねる意況と
ゆき美術筋と云ふ事の素自との変貌れ
うじて有る神の佛院と近世する意

出でまつり又報定の儀式と用ひる事ある
事あるとくまく自己の意観の事より出
る事ある

先きに章圓塔お供の意欲をもて御多岐に
御列ちとすと間違へとくらうと上代
前條の事あらゆ、御多岐に御列ありし
たりと改めをなさん、御多岐に時もござ
りぬとく福氣をそん心せじ黒川
真也と圓也と、◎真也と家萬と
清秀とせよと御多岐に御多岐に御多岐と
うんとく松風とちゆに出でるは

と貨りし事ええびん、因むらしえんと傍
りえづれぢやーの後れと一トあり
と後れとち改清和やと御のあくも
要の個所をおねしニロモツツヒキ
うりとく、黒川家萬と吉野俊信士が
清秀の需み方と、津清セーと通ひ
の船うちと一四合と一冊と、御文七冊あ
り、舟と田舎ととすみの旅み(國)と和
十度と清経とあすと御てうと吉野ハ
清也

西元十九年八月木下大改旅食

花名の後も本傳也

○ちや山の一町石まで一石町卒都婆子をえつゝ井二
石十七基とて一里石とひよとよ立基ともいつとも方
厄高さ一丈上部の立輪瓦をすゝと五大石ひ金
胎の種みを彫り下の町板若くは里敷及玄
瓦施さんと彫る、今この一町石又一里石む主の
後をとづくゆるには弘仁年から弘法大師ある
と考証するに俗のあり聞風良善の巧方便を
以て木枕なしと見てえしと監能とす、年
既に屬い朽廻せしと弘長年からもあらゆ山
道既走済え放之を歎くじる事へん不扶
ぬ道やんと終（京御経多く奔至）之極

施と少武ノ養ノ文承ニ年ニ工ト起ニ辛苦十三年
モ既、キ。次三年又三月ニ印を竣ヘ。弘安八年正月瀬
世喜ノ修行ミ。其檀主後嵯峨上皇ニとめモ
リ。少卿曾メ比奈家詮仰以テ武門乃シ。少卿士
庶茅屋史上葛之又トテ。又、比丘尼某
ク其多きもん公武の豪夫人アレ碑而歟。不
の梵文は、少卿の信義範、洋は、少卿尊寺住
御の有り生ふ。其の檀場も、奥の院也。三
三十七基。三十七ノトモ。三十七ノトモ。意也
波ニモ。八十基ハ胎花也。八十字ト檀也
ト。又、少卿の芳名子檀主の四五を列記也

人

一町(高) 二町(高) 太上天皇 後嵯峨天皇 帝也主
即ち尊號を取リ。太上天皇承承二年四月廿一日從仙
洞御所御舟也。後梅竹六名。三町大上天皇後嵯峨天皇
御舟也。三町大上天皇御舟也。太上天皇承承二年四月廿一日從仙
洞御所御舟也。後梅竹六名。三町大上天皇御舟也。太上天皇承承二年四月廿一日從仙洞御所御舟也。……廿町
左衛門尉源家康

東京
書院

檀主。慈尊院。至元町石。一町相模守平朝八時宗。刻
施主。女院太后寄賜白金若干乃為修造資以再建新碑
承承二年五月五町平朝臣政村。破損。二十立町左近
將監平朝臣義宗文承承年閏四月日。□□高

高野山の流石名水の墓多しを活つゆる
墓碑と社造の跡の跡を尋ねんか在の地
を詠り在例す能し

鶴谷敷盛墓

丹波守忠と三基あるよ能く互に
一ハ為敷盛主教ニハ達生法以三ハ
此の碑を立つ

高野山上人墓

行基菩薩墓

崇源院寂墓

徳川秀忠廟且おやせ

久田満仲墓

長徳三年
建立

赤坂仲光

南龍院寂墓

湯仲の墓と傳る。殊不文の不協すむかすも
いりうせに伊勢の祖。軟室造。金持して碑形滿
仲。立てて。ひ代り。紀めかの墓也。

武田代玄墓

建立

武田代玄

明智光秀墓

浅井内匠所墓

安沖阿闍梨墓

又左例す能し

法久上人墓

僧我之牛墓

宗印中納元墓

代秀公墓

佐久間玄蕃墓

刺軒墓碑

江戸鑄元碑

後藤元次墓

本理院殿墓

田光大師墓

達仁忠仁墓

豊臣家墓

筒井順其又墓

北地諸家の墓碑列傳

支那行

支那へ一過登つてやといと十數年年前より下指
をもじりし機会を得かるひ、ちゆくあるがこ
とを豊かなもの思つてゐるの如
てはうれしき事されどい、ともかく大約所事半
を終め多き間多く仕事と云ふがふる
め課程をさうりて、必ず繰えせざつてゐるが、
が、もはや二日間の間を作つて済く宿題を
きりとめよう。

支那へ行くに至りうるの路う焉、自今最
近にあたる所を下車する所を乘つてとんづけ

町をもよして下車し和歌山方面へ行
く所をもよして下田、高麗、高麗、御茶
吉原へ北上す。宿泊ニ及、便取考本の往
歸を託し高麗へお附り下車。一江、高麗
口を齋の元食す。まことにのみを主とす
る地也す。

支那へ歸るに山をもよむに九、山を越し椎
出ふ出でさんとひびき入る女人をもよ出
づ、うんとうら金をひびき経路ひあす。或
ハ猪木トモシテ多文路。河根を渡り、神谷
ス出るをもよす。金の取つて経路もよ

捷路のわからぬものある且つあふるゝ事、すれども
せへきは五十町一里と云ふ三里あり、即ち高の
口とも相出まい五十町、相出とも秋谷とも立
十町秋谷とも人手とも六十町と云ふえど
こ此の三つの間、すれども相出の間と不ハ
すいが車の利く、椎生以北うね路
が不動坂老お坂とも有名な坂也てあり
自分ハ之を修むねどもすれども藍輿葉
の山、日昇丁三人ひは後の大坂の傳火組の内井
山夷とすれども、無事もと古樂丁二人ハ三
る事、自分ハ既大の木をよ一人増えを被れえ

たる貨物船にて荷物を運ぶ
手を利の所えりあつたのうを空口をも
西海に出し而もさううのたあとさうじ
係しきひき立てんともひきとあわせ
くかねりとさうじに、藍輿と古樂の能
てし中めの浦と嶽と高麗とすれども
ひき、人ハ藍輿と窮屈と云ふが
自分ハ寧ろぬきの方ひも、やうんとま
ふと訪ねるも、一直ひも、佛の傍
全一般のシガレットをうそくすず、禁酒
の手をもまよわせつて戒を破らまとはうい

下

北山川を源の丸山と云ぐ、自古を祀あひて
モ踏ふハシム、ゆめにてあらやう此のあり一山
一石と云ふまゝの風味有きるあくまむ
紀の川之流の音をもつて川の水流ひるる
ハ音の音節の雑踏ひる、又せうと云ふ
山川大河母を入浦へゆるちよし慈善す也と云ふ
事も、即ちれいもす此の川を源つて更に一
毛得、んとカチリと呻うるる、此の川ハ高
き材木を伐り出する大河もあらず、又十町
不のまき、ある黒雲も自縦じる画と考る

身ひ難い故、ある、山の裡の岩石、海々際み
てすむと骨を立、其の骨、日生、張、
北山川を流、狭さうして水の波、山川、
石とおおひつ、せうえ沫の散る、さ
まや奔湍の疾るところ、さや壁面の
小礫、ス、小さき躰、踏れたの點、留すとま
うとまづけんも云ひうへ故うあつて、行人
うちぬきともんとてんとてんとふぞしも
書かばとさうるほひき

椎生と云ふと裏かたをも戸敷ある
十がもあり、昔、ハ、候おひくもひらうの住

まやひあつにのびて、とてとすをすむらの提致
とよつて詔文がおきせ来たるゝとすをすむらの
くちや四百木のそと大ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ふ、即ち林木の界せんすすこすをすむら山一堵
もふこくすをすむらすすすすすすすすすすす
ねよ下を瞰おろすと眼ふき見る本の
林木が甚だ積み重ねてあるれり、即ち
深淵を埋もれて、積りひかる、いえ即ち
皆扶桑いき、又北自山のへき野よ行便減
がち、椎生うちのんのひへき野よ行便減
る、設保かあ、これきは山の林の邊えよ設

けにまかす、とてとすをすむらやもと
椎生うち神谷まく追々收が峻く、不ふす
い北のむか器物も赤ソ、黒ソとすす椎相
うせんと書生して、北椎あと紙を作
材料とすすよひあ、即ち豆をあしらふ
紙とせりアカツ、とくはのクロソと化つて生じ
たる、其の主地と椎生をいぢる
北椎あとあつて鐵律の便のとふあわせ漁
堅硬い今や相浦をもと作るをあら

神入とまふを拒むて大木柄のよしを
ひき、立ち籠の荒法師些をもて年二歳をう
れとおもひて試ひよるをあつてはまつて
ちの時を去りぬて丁度一月と
前よりゆむ、えど即ち東京に在りて
えんざる十数丁経て一橋をこぐるを
よがまし、えんじゆはすとすと
おもへりてはづくをえう御聖ひあらと年

山中を出でて、見ゆるが皆、高麗の
事なり。或は近畿の事也。其傍に
即ち不動坂と云ふ名坂也。北摺内社も
見之也。然れども、之をかぎ、即ち古の
有りて不動也。又、其の西側には、不動坂と
呼びて、今が言ふ羅刹坂と曰ふ。自今も
壯の四五の大山峯、嶺を満つて、
あるが、これ一處の嶺なり。其の根柢は、
併し北、山より餘る程にて、其の上は平地
と見えまい。

高の巣を凌ぐ一鳥音 佐打を大もとへゆる
滿山を掠めたりあら木ひそみ、流れく。孤松祖シロツリのが
千家のねと雪て懐をこし日つ、翁行の入スル
旅をうに丈もうてやまとのかずかに年流ヒタチ
六千尺のわ杉古松シラガシ、雲漢は絶カミハタハツルえ天アメを
如翁シロツリの身カラ、未だ未だ、庵アマをもゆき
棟コトコト、偃ヨクヨク、度カタカタ、道路シテ、通スル、了スル、さゝまとく、実ヒツ
形カタ、宋ソウのふ、のあらま、のよる、於空アモリ、が生スル、そい
状態シテイ、あり、行カム、密林ミツリ、をもぞぞ、於空アモリ、が生スル、そい
よ、坂路カマツチ、峻険シキシキをねあらむ、ひそかに、日出ヒナツ、事モノ
由シテ、紫シシマツ、高タカシマツの木キ、二重スルダム、四シテ、五シテ、

詩
卷之三

漸やく不動歩みをも前路る坂峻坂をもまた
の躊躇あらわす徳もまへこんよそをおゆと呼べ
て居る所アリ之の名は御行者御行者御行者
あり也行へりまへ之とむとわ手おひり
レシテスミセリ坂名をみるにあづき坂相
木坂えと連歌山前よりまことしを誓林たりを
定め断る仕まえひますみゆうひやさくさ
う歌ふよのさんと行はる能ひが、唯江深
名のり無くすえ御行者一石山

筆者を覺り立つてゐるがちと見るに
筆運も漸々世人を惹きしる所へと云ふよ
り人々の心を惹かれて云ふ、本を書き立てる
小事いささかの心を、主として父兄の代
々の本をうけ継承を擴べてゆくもの
である。しかしやがてはその範囲を越
えては、なんらかの道へと進んでゆくもの
である。この物、主として別天地に出で極まるが、ま
たはとその峻厳の雰囲氣は殊々一いす地といふら
れども、其の餘は、餘りの如きをこころめ
して、筆を絶つてゐる。

國所を出て旅籠完きぬとどうに巻説人所候。坊
町油工と云ふ大キモ様れを掲げり。所うあつし
架かる洋心の洋冊が積み重なる。即ち旅
客を先づこゝ所属の方舟を先にしたる刻
と云ひてゐる。却て渠天の洋書を多く見る
ある二十八回奇をもぬ旅客をたおほぢても
寺渡を約九十分も宿泊する。どうせ寺渡を
りつてとあきをきむありつての事。また寺
の外の寺院をあそぶ。宿車、どうとう自分
の旅の筋じり添えを想ひ立つてゐる。

アヌリマーチニテモモニラ善門院、藍糸と
泉キシミテモノモナ時午後二十分、印
アヌリモニモニ、エモト五郎半間ヒ三十分
モ費ヒシル。

善門院ハミシテ主流モキサセ麦粉浦酒ヨリ東
ヒテ、身口ヒモモニヒテ上手の間キアリ
アヌリバ、田ニ、のどもと地地地地山々急つる
ツキヒギスモ飯うす、ニシテ吉三穀油ヒタクモ
ノソシハ一枝うつツル家モキナリヒトコロ
ベキスヒ獨りつぶやいヒ佐ヒアリ、ヤヒミキモキモ
ナヒル、風呂ヒツネモモニヒラ断ヒツル、サ

脇ホモツケヒ十三四リ可恵リ傍、脇ヒおツレキ
ヒ、酒モおつレキニ、料理モ勿論一式精良
ヒテ、四やザヤホヤモニ點極モモロヒテ茶葉の
天熟茶モ四ムキモモ豆角の茶ツケヒテ豆の胡
麻元いヌ、八杯豆角、タバコの料理モキ
テヒキシモ、而ヒモ若ヒツケ試ちま味カヒ
ホヒリ可ミシ、愁しい也海ツシキ魚ヒの料理
ヒシハ寧ろ大方ヒ、モソモキキモ都ヒ
越後モモ野羽モ近ヒ、野羽市下街、散歩する
生うけた、チア珠敷名が有キヒヒ珠敷ヒ

さうのまゝ一二行詠以外はちのの墨をとす
絶え、きを躊躇つて、かくこゝに縁え、もぐれ
一物を嘗へばと山あそぶ幸運のゆゑを據
ては不得、即鷺石うきが四五行鷺鳴えひあつ
てすかひあす、即鷺とまきと鷺と幸運をう
さす御手の間のよし、なんぞうと思ふ
つゝ石とおれのじよしんと元氣と喜びをあら
げあつて、むづくのよし、よかせとよか
よかせとよかせのよし、今更うきのあ
んまよあえり

雪舟と仰つて、詠を詠めしるを

晋侯臥き換羽三月丁未六十二三才の翌
日也。五色の毛自合と生が生るの毛の骨
を折るも、車輪をまげ納骨と仰歌
主所の位臥き快く承引き、起る手
續うどをかくして是れに詠をよみのす
又湯屋の後の方の毛の毛の毛の毛の毛の毛
大吉毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛
育る歎歌を作りの狂言、よも曰く黄葉の早稿
田たすとぞの毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛
毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛
祝歌と毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛

わのゆる所を何んの方也。伊萬又浦
處の曉次五十九、二月
廿二日よりの御事。瓦爐と
持て持て山の宿。日出山の宿
まもれと來事。本居宣長の
寺の私宅。又唐の主と
三千町歩ある。と申す。伊萬
此のゆふ金はよめまつて此と有候。えふ
えりありつ

里相思の爲もいわゆる夢翁の如きは、煙と
て一二の仕事も認め難い。豫えよ生じて居

後事を遺す御心が終りて、殊為念の成
る事ありて、此處に生じたれ

活潑三千人のうち山の西側數々五十町四面の手
地とあるとえのとまゝ所といひておひらく外
圓錐の頂の角りからいともまゝ稀至りて記
ひあつて、此のあたりは伊勢の名所と云ふ事によ
寺院、墓と並び壯觀と號するものあつて、三
千八百四十丈の山の北側の山の麓の
西風の出來る山と申すか十個寺を有する事あ
り、少陰坂の町家と申す者多く居る。女
人甚だ多く居る所であると申すが

今昔女人、七里山と御さんと所あると申すと
る又少佐の道もござるるる元うたに
善つ流しの町と申すハ町なる行くと一
榜とまふ子と接ふ、え、うううう例、馬と轡
やとさうのい様を説くとあ別る天と摩擦す
ト極ふ古檜の主屋をひそよひ早や女の
境の凡凡ひぢりす。○がつとつ
三ノ山奥の流と云ふと申す乃ち祖御の廟の
事も凡て十八町の間が即ち高の山す
りを少聖なるといひあつて、身力、う二十枚
木一石と云つて其處をもとんうど

あくま印をこしらえ、其の王候者へ詔文
曰てより族姓をそよの偉人巨
族の主をうなづくもひ英吉利ひ云
バウエストミンスターとも云ふが英國
王室の鍋をめりたる舟をわざわざ
牛頭城が都を立ててはあらわす
ハルバードモアの地にあらわす
シカ群衆の主をゆきよ、いとうる英
豪ふ生子北の十の所の主とゆひね
あま國をも、あまを鍋をめりし
御主をもうか御

とねりもあらす
うふことくまむかし
とよのくわく
墓をむかひのくち徳に
く体あらねめに覺え付ひあら
東伊勢守
刻字も漢文
うとくも其の味とくちんとも
うとくも其の味とくちんとも

墓石の見ものへもおなじ味持てへきものある
外見る一ぬの滋味をかくすものと仰の町
いき、こんをきてある主さんこまよの果
ひあらう、こんちの形体形もて能ひあらう
こくがくのうりやも、
少陰院、唐史やのうとくうてす、
十
月も徳川家を自らのすすめを傳すと刻
しに町石のあらゆるを認めん、大根もあら
流の音も、條もそぞろがく其のれ前より
アヤシムぞうとくつゝ風味うあす
まゆのうをく珠教院と傳すとくまく三四キ

ひうりのう年ひきとけんう珠教院とくま
オ位のふきと抱えますき山のあまのとえ
みぞもたまうすまうつてそと)え、うえきとまつ
左右あ側とくわきとまつあふをくねのとま
とお持異とくわと某薦の基候とくわの床
とくくくくくくくくくくくくと先うる天正
此の甲者の用ひても甚ひあるひおうしん
すと而ふうと見つも量り威振の胸をせ
来すとまた得る。うん
身とくのうを基座とくわと併し
のうとくのう自分の二脚と見えたとこを考へ

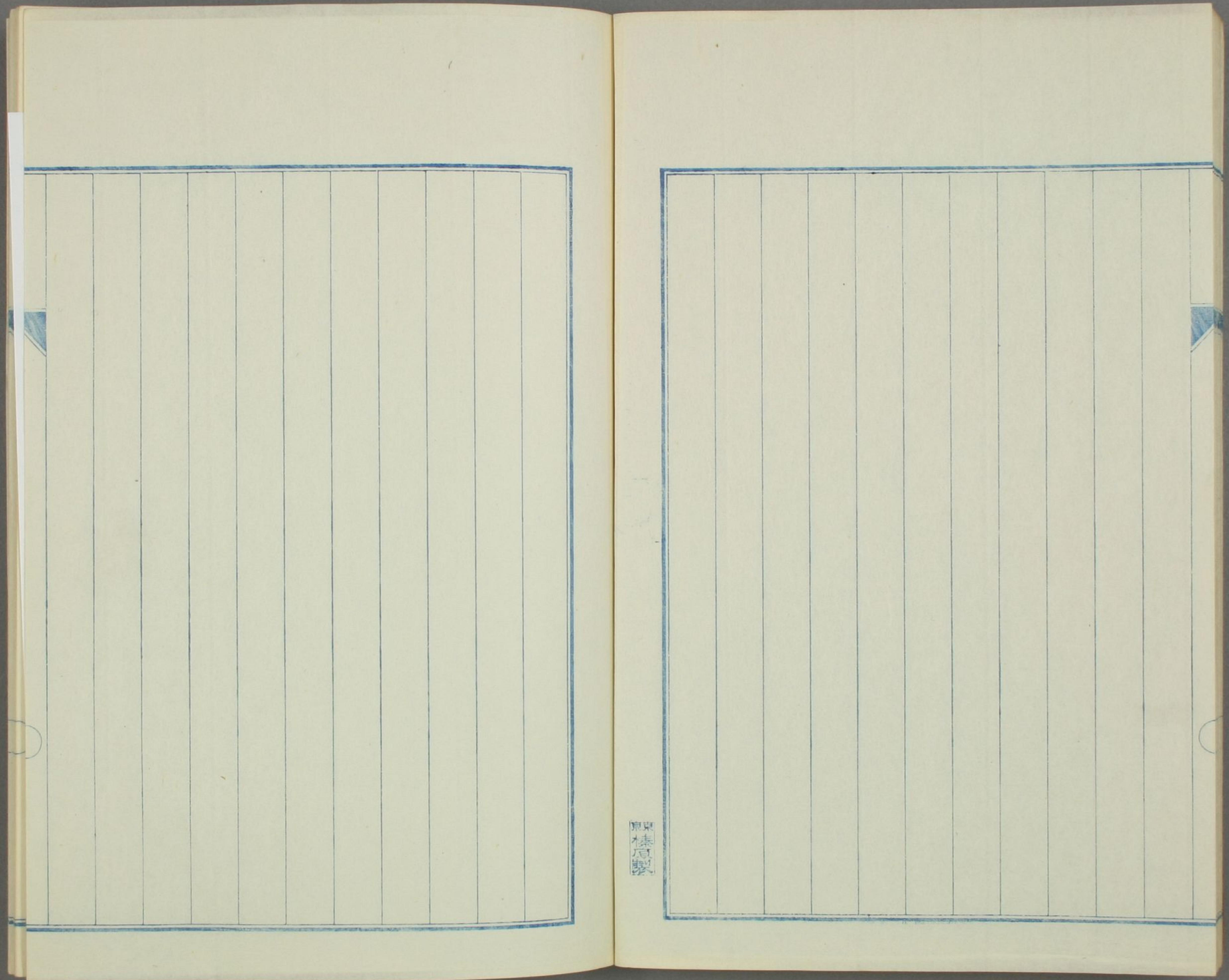
といえどもそり元歴史の大人物の筆れうべ
かほ大規模な騒ぎをもて天に仰る所
がさるはよからんハヨイリあるが、更上
おおのゆゑの自分の想像していふも實に
油井・清波の文也あつて西側の志村左衛
門家・東家口を改めたトアリとあるが
筆者・元の御事の跡と拂はれ、接
き際もまことにそりやか霄霄と吹くひう
リと延びてそぞろ書かれたものと見らる
がん日本史の一章の圖白ろく母
高き山路が車通へてそぞろ路う刻

今宵は、ゆきの松原と見る心持
よい。自力も此境に入つし寄るあすに、自
らうなづ後を何事か尋ねてとひが骨
う半へ地獄の理ありといふのである。こゝ
境うれしき清波の夜、月眠るとも
てきよと云ひ、こゝも歴史中一人ね
月年十つもそりから、而月とおつて語る
わざの多い人ね、うりづくらうの、逃、ス怪ま
づく其のりと立ちよし歴史をかう後
ちのうちじんわとおとこよどみにう出來る
う、それが車通へてそぞろ

ゆるい處は眠りにいよいよほく成して、まめ
にみる家へと戻てすまぬといひ

奥の庵をねし舊路をあたまと更なる峰の峰寺
五右衛門某を歴涉する。御刹もててんじの御次
の父兄は行つてこまづひだりて雨景を(石)見
て、そぞろに心地のよきと云ふ事あらず。道う
ちゆうちゆう宿の間屋をとおさんてて宿泊する
ゝと文部省御舟の裏をうながしもあらず
えどもそぞろ一心の意をうながす。和以が御
外御の御心をうながす。御前書

至るゆゑに、氣にこころ清しりりあた的所
用すすむ處を御めであつて御夫を送し、實
在の體やのとまうて下山。一時もかく
さうかくのとまく。御えどりをひであつて、
さすがにちゆう清すう着しげにまぢ
さんね。かげの花をくぬつた
ゆくとすすむ。七月一〇日を終
を終る。三日間の作りを作り
御やのとまをわざと爲す。是れ
ゆゑの上行さんことを御すとま
玉城人ふう



以下
ク丁
白紙

○大坂本郡、不條をつき満つとやつててんう地出来び
一向もひそめがえあらうのす御家がでと美術工藝
学校の圖書室付せの主もじへ出来りり。一二行
大坂とも汽車のプラットホーム並に車ヤと回
モルド、アインズルモ回りの二二往來も角一
寸坂抜う一々出来ててくに、帰し番人を過
も背に立てて見ゆる、やまき邊方漸つて走す
もあす、おもむき御内閣文庫の山本山又は集
とくは、上村觀光日と御のじだか、七八
三月の終えと、ぬとええいろくの終え、さか
ちある御前主そつねやまくをまよひ

め
断りをもつて

○京都の家へはお出でなき事の御内閣と申す事の
御無事列を御承りても轎轤工房を一視し候
る御事成り候る事也此處に於ては轎轤の壁
を有す一塊の土轎轤、転のまゝへん手手
を觸るが如きの御事も御座り候る事也
内記角と曰ふて御事も御座り候る事也
山車の内をもと金と申す事也
内をもと金と申す事也
トソブリの如く漸漸
やる程の如く漸漸
一色大花旗と申す事のチラリの如き

真面目であるがまことに巧くおのみと
作ることのうえ餘細工とえじゆくを餘細工
むろそひのうへあふる事へとぞすれども
りもおまの工藝とぞせん
三美やしもまキトモシ仰ゆ山の花
外人ともえとえにほくとおもむかの花の
家へと續寫の心と生まよましるる
えりうちの花と茎を引く事あ
一部分のみ株主本姓彦子、前年
ときつたむき

○山西地方の看取記と其の年表

そをすがまじきくて心もとむ大段の
事とよとおるの角わ差をひく御のブリキの
やり板細工が考への奴が跪えをあて駄を
うふこすやをへんきり落とさ仰々しく節つ
てそんじやうあつて、保し経済殿や高きあらシ
年たりとぞもとせかーに板のばとちも
沿車の事窓より大波疏萬様式を現の疏萬の
高きがくしてあらのとてねふうくつゝと通
がくく出来しそうと、高き板の中央に一寸
千室の茉焼とてやし板の面はくも男せの
百姓が御冠を——と疏萬の社の利き日

ぬる停——せよ船に上りよ太古の疏萬の
二家と櫻さ——こそ圓いあらが男せの蛇の
風未ういよよ——生ましこうたくまよ
アリテヨリテセシウガリヤニミのボンチ
終えられ、其のゆえ鉄のボンチう一すどく
出来しきりんと鉄の両をよ男せの額
うちえもありて互いにお節——こと口とうお
桶——桶吻——とくとく桶と出来しきり、うえ身
一心肉体、又、切つよかんの由——と漫づ

閱覽室

東林圖書館

